

歌集『風土』を読む

加藤久賀子女史の歌集『風土』を読み、感ずるところが多かった。とりわけ、

この十余年間は、私にとっては戦後の崩壊感（中略）から徐々に立ち直って来た時代であった。この集をまとめることを契機として、永らく引き摺って来た『戦後』と訣別し度いと願っている。

と述べられているところに、心をつよく引かれた。このようにいう加藤さんが、私には大変聡明で、頼もしい人に思われた。それがただ意識の上でのことでなく、一つの確乎たる形によって立派に実証されていることに、同じ『戦後』にかかりつづけている自分の優柔と対比して、羨望をすらおぼえるのである。しかし今は、その問題に深入りすることを避けて、この歌集の読後感の一端を述べることで、責めをふさぐことにしたい。

みのり田を発ちし驚群なか空に展開遂げつつ方向を換ふ

(白鷺)

巻頭に一首だけプロローグの形で掲げられた歌である。このような編集上の配慮にも、加藤さんのこの歌にかけられた思いを知ることができる。加藤さんは、

少女時代の私が憧れていたものは、象徴詩としての短歌であった。『あらゆる風景は心象風景にはかならない』とは、いみじくも言い得た辞である。短歌におけるこうした考え方は、私にあっては、長い間道を迷い歩いた末におのずから歩み出た大道であった。巻頭の一首を得た時に、私は自分の足の向っている方向を知った。

ともいっている。加藤さんの短歌に対するこのような自覚は、王朝の女性たちが、愛情の苦悩の中から自得した心法のそれに通ずるものであった。そして和歌の伝統は、このような自覚に支えられて今日に生きつづけているのである。ここでは『風景』は単なる自然現象ではない。去来するさまざまな心象を『風景』に転移することによって、歌びとたちは鎮魂のわざを実践した。和歌の歴史はこのようにして創られてきたのである。

加藤さんの右のような自覚は、とりも直さず和歌の歴史に身をもって参ずることもある。そして歌集を編むことによって『戦後』と訣別したいという決意が、このような自覚のなかからお

のづからに導かれてきたところに、同じ時代を生きてきた者として、大きな意義を見いだすのである。

吾が内に我を逐ひまくる声ありて庭桜に鳴る野風と合す

小麦の葉柔らに伸びて嘯みしだく犬のしぐさの新鮮にして

堰を切られ野川を溢れゆく水のきはひに乗りてゆく思ひあり

内部で激しく葛藤するものが、和歌世界の「風景」に見事に転移されてゆくさまが認められる。

このような明け暮れのうちに、加藤さんの平常心がようやく定まってくるのである。そしてその「平常」の目に耳に膚に、外界は静かにうけとめられる。

川原にささなく鳥を聞きしより呼びさまさるる平常心あり

梅林に少女入り来て枝切りをり紅きセーターの肢体暢びやか

あさあけの遠き空より吹き来り春呼ぶ風の声ぞ聞こゆる

さわやかに晴れて素足の冷ゆる朝山吹の枝を切ると降りゆく

しかし加藤さんに報いられたものは、それだけではなかった。

夜となれば傍に原書開く子の初々しくて新鮮なり

今日よりは首途の響きと吾が聞かむ子を出して聞く列車のとどろき

吾が血の裔かくはうつつに生れ次ぎて稚な児眠る吾が膝の上

四人の子たちをそれぞれ立派に育てあげ、その首途を送ったばかりでなく、膝の上にはいとしいお孫さんまでがうつつに恵まれている。そこには、ようやくにして訪れた大いなる安らぎがある。それは加藤さんが、息づまるような長い苦渋の細道を抜け出て、広い花野に一步を踏み入れたことを意味する。目にふれる花々にかけて、加藤さんほどのような歌を詠みついでゆくであろうか。私は今期待に胸ふくらむ思いでいる。

(昭和三十八年十月)